

- 1 去年今年首から吊るすものあまた
- 2 鳴き砂にしみこんでゆく初明り
- 3 繭玉の影に濃淡ありにけり
- 4 一升瓶担ぎのままに御慶かな
- 5 手加減の出来ぬ双六上がりけり
- 6 降る雪や繰り返し聴くジムノペディ
- 7 姉らしく振まふ朝や寒卵
- 8 水仙や前だけを見て疑はず
- 9 那谷寺の白のひとつや残る雪
- 10 石垣の立ちはだかつてゐる余寒
- 11 会はないと決めし日に巻く春シヨール
- 12 ゆつくりと準備運動既出し
- 13 ものの芽ともの芽結ぶひかりかな
- 14 銭洗ふ春の水てふ輝きに
- 15 今日の日はおとぎの国の暖かさ
- 16 天を向く幹を引き寄せ榎芽摘む
- 17 水温むほとりに響くトロンボーン
- 18 振り向けば白塔高し卒業す
- 19 春コート夢ばかり見て海を見て
- 20 春雨てふ銀の鎖をくぐりけり
- 21 賑やかな駄菓子の色や涅槃西風
- 22 フイボナッチ指数のごとく蝌蚪生まる
- 23 思ひ出は横顔ばかりヒヤシンス
- 24 春光や畳廊下のひろびろと
- 25 資生堂パーラーに寄る花の頃
- 26 二番目の女の来たる花の宴
- 27 朧かな恋の悪魔と手を結ぶ
- 28 さくらさくら起承転結はつきりと
- 29 春の海渡るものみな映しをり
- 30 鱸綱を結びてよりの遅日かな
- 31 川越の長き麩菓子や風光る
- 32 亀鳴くや雨美しき交差点
- 33 川二つ越えて八十八夜かな
- 34 麗かや生春巻のみどり透く
- 35 太鼓にも笛にも飽きし祭の子
- 36 かつぼれの膝の高きに夏兆す
- 37 朝採りを天ぷらにする夏来る
- 38 恋知らぬ手をもて鰻捌きけり
- 39 また同じ夢を見たのよ青葉木菟
- 40 還暦を過ぎたる象に青葉雨
- 41 夏服にしみこんでゆく雨の音
- 42 仲見世を抜けていよいよ暑さ増す
- 43 箱庭に天動説を思ひけり
- 44 をとこみな出払ってをり打水す
- 45 モーニングコールに似たり百合の香は
- 46 遠くまで金魚の水を買ひに行く
- 47 増上寺裏で十年氷売
- 48 小数の暗算できずソーダ水
- 49 足閉ちて女に戻る昼寢覚
- 50 銀漢や貧しき漁夫の漕ぎ出でぬ

- 51 虹二つ生れしこと告ぐ配達人
- 52 星飛ぶや八時ちやうどのクラクション
- 53 手を挙げてピエロのよぎる星月夜
- 54 北へ行く旅の途中の花火かな
- 55 そろばんの玉の暴れるほど残暑
- 56 満潮に秋の海月は逆らはず
- 57 新涼の酒蔵の戸を引きにけり
- 58 鬼灯のはちきれさうな恋日和
- 59 横穴を覗き太古の秋に会ふ
- 60 人はみな貝殻残し秋の風
- 61 みづうみの色を容れたる桔梗かな
- 62 爽やかや縁切るほどの縁もなく
- 63 広野続けば吾亦紅吾亦紅
- 64 金平糖白き一粒残し秋
- 65 否定形ばかりの男とろろ汁
- 66 秋風やベッドの脇の鉄アレイ
- 67 いまさらの告白ばかり青蜜柑
- 68 擦傷の絶へぬ顔見せ敬老日
- 69 黒猫にアリバイのなき夜長かな
- 70 存問は巨峰の皮を剥きながら
- 71 それぞれのうしろ姿や鯨日和
- 72 水澄むや釣糸揺るところより
- 73 明るさは私のとりえ秋刀魚焼く
- 74 秋の雲触れて溶け出す落暉かな
- 75 虫売になりたき頃の瞳かな
- 76 秋風の遠回りして届きけり
- 77 客船のタラップを踏む十三夜
- 78 石榴の実秘密こぼるごとく裂け
- 79 列なして枯れゆくばかり破芭蕉
- 80 鹿笛に山河大きく開きけり
- 81 国訛り通す女や稲光
- 82 川のもの山のもの寄す下り築
- 83 秋深き岩のくびれの幣白し
- 84 数へても増えぬ松茸数へけり
- 85 荒海へ傾ぐものみな末枯るる
- 86 立冬の人を待ちゐる木椅子かな
- 87 石路咲くや海照る屋根の文学館
- 88 千歳飴提げて利発な双子かな
- 89 江ノ電の一駅分の時雨かな
- 90 小面のしづかに冬を纏ひけり
- 91 新海苔の置かれ相談事などと
- 92 うそ寒や縄文土器の失敗作
- 93 一枚の障子すたと外れけり
- 94 革ジャンのジッパーの噛む冬日かな
- 95 もののふの声とも思ふ冬の雨
- 96 再会を約していぶりがつこかな
- 97 クリスマスツリーばかりの街にゐる
- 98 台詞無き村人Bの息白し
- 99 ぎちぎちと革手袋の祈りかな
- 100 歳晩や佳き音たててシュレツダー